



みくびびだより

発行 御首神社社務所

御挨拶

拝啓 当社社の御神域も深い緑に包まれて新しい息吹が感じられるようになりましたが、皆様方に於かれましては愈々ご清栄の事とお慶び申し上げます。

前号（平成二十九年十二月号）にて天皇陛下のご退位のご予定を平成三十一年三月三十一日と記載致しましたが、その後の閣議（昨年十二月八日）により、平成三十一年四月三十日がご退位、翌日の五月一日が新しい天皇陛下のご即位という日程に決定されました。陛下におかれましては、ご退位まで残り一年足らずとなり、そのご準備等お忙しい中に有られましたも、国民の幸せを祈り各地で人々の声に耳を傾けられ、象徴としてのお務めを果たされようとするお姿をお示しになられておられます。私共は、この大御心に少しでも報い奉ることを常に念頭に置き、日々過ごすべきではないでしょうか。

また、皇太子殿下におかれましては今年二月の記者会見に於いて、今後の皇太子としての過ごされ方に対し「今後とも、両陛下の御公務に取り組まれる御姿勢やお心構え、なさりようを含め、そのお姿をしっかりと心に刻み、今後私自身が活動していくのに当たって、常に心にとどめ、自己の研鑽に励みつつ、務めに取り組んでまいりたいと思います。」と述べられ、新しい時代の天皇の在り方について「両陛下も大事にされてきた長く続いた伝統を継承しながら、象徴としての天皇の役割をしっかりと果たしていくことが大切だと考えています。そして、象徴としての在り方を求めていく中で、社会変化に応じた形に対応した務めを考え、行動していくことも、その時代の皇室の役割だと思えます。（一部抜粋）」とお答えになりました。

我々も天皇陛下、皇太子殿下のご意志の下に新しい時代を迎える準備を整えて行きたいと思う所存でございます。

最後になりましたが、皆様方の御多幸と御健勝を祈念いたしまして、御挨拶とさせていただきます。

宮司 三浦 篤

祭事報告

▼年越大祓

十二月三十日



〈人形のお焚き上げ〉

毎年、年末に行われる神事で、皆様が一年の後半で知らず知らず
に受け犯した罪・穢れを、人形に
託して忌み火にてお焚き上げた
しました。

▼元旦祭

一月一日

午前零時、新年を迎えて一番最
初の神事です。

国の隆昌と世界の恒久平和を願
い神社総代役員参列のもと厳粛に
齋行いたしました。

拝殿前では多くの参拝者が鈴の
音を響かせ、神様への新年のご挨拶
と共に各々の想いを真剣に願っ
ておられました。

▼左義長

一月十五日

本年の左義長は天候に恵まれ、
平日にも関わらず、多くの方が参
列される中齋行されました。

一年間に亘りご守護戴きました
御神符や御守、また注連縄（しめ
なわ）や正月飾り等を、感謝の祈
りと共にお焚き上げいたしました。
多くの参拝者のご理解のもと、
予定通り正午過ぎにはお焚き上げ
を納める事ができました。

▼浄火祭

二月三日

毎年節分の日に齋行される神事
で、ご祈祷で神前へ奉る金幣串を
始め、ご家庭の神棚にお祀りされ

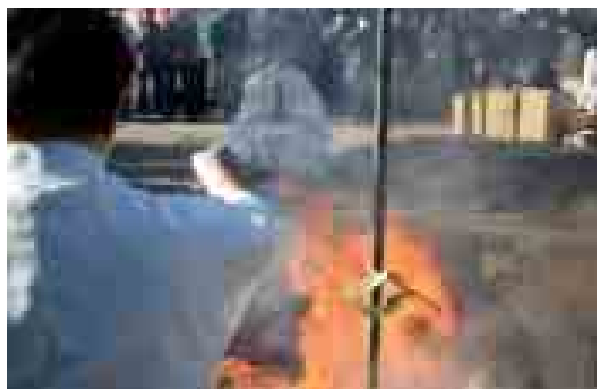


〈忌み火にて点火〉

ました紅白串や祈禱神璽、また祈
願奉納の絵馬や帽子を焚き上げ、
諸願成就・厄祓いを願って、恙無
く齋行されました。

氏子区域から、厄年に当る男性
四名が神事奉仕者（厄男）として
選ばれ、焚き上げの最中には火炉
の四隅に立ち、祈願絵馬や金幣串
を手にとって「氏名 心願成就」
と唱えながら次々と火の中に投げ
入れて行きました。

また、神事終了後より昼頃にか
けて、ご家庭で不要となった帽子
の焚き上げが出来る事も有り、多
くの方が帽子を持ってご参拝にな
りました。



〈厄男、焚き上げ中〉

▼祈年祭

二月十八日

祈年祭は「としごひのまつり」
とも言われ三大祭（他には例祭・
新嘗祭）の一つに数えられます。
今年の五穀（米・麦・粟・豆・稗）
豊穣を祈り、あらゆる産業・工業
の発展と皇室・国家の安泰を願
いました。

▼鉾山神社例祭

三月十七日

当社の境内社として本殿の北東
に鎮座し、豊受大神をお祀りして
おります鉾山神社の例祭を滞りな
く齋行いたしました。



〈鉾山神社例祭 祝詞奏上〉

▼例大祭

四月二日

毎年お祭りに合わせるように満開となる桜ですが、今年の開花は早かったため、桜が散り始める中での例大祭となりました。



〈いざ、出発!〉

当日朝から子供たちの賑わう声で境内は溢れかえっており、午前九時に発輿祭が行われると、子供たちは一層元気な声を上げて神輿を担ぎ町内を巡幸しに行きました。昼頃には神社へ戻ってきた神輿が参道横に飾られ、境内を色鮮やかに彩りました。

午後二時半頃には、境内の特設舞台にて氏子区域の子供たちによる「打ち囃子」の演奏です。子供たちは、例大祭のおよそ一週間前

より毎日神社に集まり、一生懸命練習した成果を余すところ無く発揮し、ステージ前で聴いていた参拝者の大きな拍手が、境内にいつまでも響いておりました。

打ち囃子での賑やかさも静まり、境内を包む空気が緊張感を増した午後三時、献幣使をお迎えし、いよいよ神事の始まりです。総勢九名の神職が奉仕する神事は、多くの参拝者が見守る中、厳かに執り行われました。

午後六時半頃、昼間の神事も終わり、静まり返った夜の境内は、参道などに設置された提灯に火が灯され、幻想的な空間となっております。

その頃、昼間に打ち囃子を披露



〈夜の打ち囃子奉納〉

してくれた子供たちが、町内の外れより隊列を組んで出発します。演奏をしながら町内を練り歩き、境内に到着するとご神前にて今年最後の打ち囃子を奉納し、お祭りは幕を閉じたのです。

▼南宮神社例祭

五月四日

南宮大社の御分霊（金山彦命）を御祭神とし、本殿の相殿社として御鎮座しております南宮神社の例祭を恙無く齋行いたしました。

▼お田植祭

六月八日

境内に作られた神饌田前にて神事が齋行され、宮司の手により早苗の植え付けが行われました。

尚、この神饌田で収穫される初

穂は、十一月の新嘗祭にご神前に供えられます。

▼農休祭

六月十七日

当社を始め、氏子区域の田植えが済んだ頃に行われる神事です。

田植えが無事に済んだ事への感謝と、今後の稲の無事成長を願い齋行されました。

▼月次祭

毎月一日・二十日に恙無く齋行いたしました。

ご奉納頂きました

▽平成二十九年十二月、海津市南濃町の中村とみ子様より、拝殿東側及び遥拝所の壁代をご奉納頂きました。（写真は拝殿東の壁代）



▽平成三十年一月、いなべ市北勢町の安藤信幸様より、案一台をご奉納頂きました。



以上、ご奉納ありがとうございます。

神社について

「稲荷信仰」

一言に神社と申しましても、その信仰の形は様々です。今回は、『稲荷信仰』について少しご紹介致します。

稲荷信仰とは簡単に申しますと「おいなりさん」として親しまれている稲荷神社（の神さま）に対する信仰のことです。

稲荷神社の御祭神として一般的な神さまは「宇迦之御魂神（うかのみたまのかみ）」です。神名に有る「うか」とは「食（ウケ）」と同じ意味を持ち、食物の神さまの事を指します。また、神社名の「イナリ」とは「稲生り（いねなり）」から来たとも言われております。このように稲荷神社とは本来は稲作・農耕の神さまとしてお祀りされてきたのです。

また、稲荷神社といえは「狐」を思い浮かべる方が多いと思います。農耕中心の日本に於いて、狐は田の神（の使い）とする民間信仰が多くありました。これらの民間信仰が稲荷信仰と結びつき、狐が稲荷神の使いとされていったと考えられています。



（歌川広景 王子狐火）

また、稲荷信仰が世間に広く知られる過程には、仏教的信仰との関わりが大きいとされ、平安時代に東寺建立の際、真言宗の空海が稲荷神を東寺の守護神として勧請し、後に稲荷神を仏教経典の荼枳尼天（だきにてん）強い神通力を持ち、あらゆる願いを叶えるとき（れる）と習合した事で稲荷神が農耕以外の信仰としても広まったと言われております。

江戸時代になると、稲荷神を屋敷の神としてお祀りする人が増え、江戸に多いものの喩えとして「伊勢屋、稲荷に犬の糞」とまで言われるほどでした。この頃では、商業神としても多く信仰されていたようです。

さらに、火事が頻発した江戸に

おいては、稲荷神社に防火の願いを求めていると言う話もございませう。稲荷神の使いとされる狐に由来する考えのようで、狐火で人を化かす、狐が火事を予兆するなど、狐は火を掌るとする信仰が民間に広まっており、稲荷神社へ防火が願われて来たと思われませう。

ちなみに、稲荷神社に見られる大小の鳥居が多く建ち並ぶ姿は、江戸の人々が願掛けが叶った御礼として、献納したことが始まりと言われております。

このように、稲荷信仰とは農耕神として始まり、神道・仏教・民間信仰をうまく習合させ、時代の流れに沿いながら商売繁盛・殖産興業などの信仰を広げ、殊に江戸時代以降には庶民の衣食住に関するあらゆる祈願に対応してきました。その多様性こそが稲荷信仰の特色でもあり、集団（地域）から個人（家）に至るまで多く受け入れられ、現在にも続いて来たのでしょう。

稲荷神社は稲作や商売繁盛の神で、生活に関係が浅いと感じていた方がお見えでしたら、今回を機に気持ち新たに、稲荷神社へのご参拝をしてみても如何でしょうか。

御首神社ホームページ 神職への質問Q&A

問 身内の者に不幸があつたのですが、神社へのお参り、また神棚へのお参りは避けた方がよいのでしょうか。

答 お尋ねの件ですが、神社・神棚へのお参りはお控え頂いた方が宜しいでしょう。また、その間の神棚は正面に白紙などを貼りお参りを控えるのが一般的です。

その期間ですが、地域の風習などにより様々ですが、一つの目安として「忌明け」までと考えて頂ければ良いかと思ひます。忌明けは、よく四十九日と言われますが、神道では「五十日」で忌明けを迎えます。

尚、忌明け後はお祓いを受けられますことをお勧めいたします。

纏め 身内にご不幸があるということ、誰しも悲しく辛く心が引き裂かれる思いをすることでしょう。この暗く沈んだ気持ちの枯渇が「気枯れ（穢れ）」とされる考えも有ります。

忌中の期間は故人を偲び、御霊（みたま）を鎮め、慎んだ生活の心がけてください。

祭事案内

▼西宮神社（相殿社）例祭

七月十七日

兵庫県西宮市の西宮神社の御分霊（蛭子命）を御祭神とする相殿社の例祭です。

蛭子命は、商売繁盛・事業繁栄等の御神徳がございます。

▼末廣稲荷神社例祭

八月五日

京都の伏見稲荷大社より御分霊を賜り、境内の東側に御鎮座しております末廣稲荷神社の例祭です。末廣稲荷神社の参道に氏子の子供たちが描いてくれた絵を行燈にして掲げ、夕方には火を灯します。辺りが暗くなると参道は柔らかな光で包まれます。



〈末廣稲荷神社例祭〉

▼夏越大祓

八月五日

当社では、毎年夏に行われる神事で、皆様が半年間の内に知らず知らずに受け犯している罪・穢れを人形（ひとがた）に託してお焚き上げし、残り半年を無事健康に暮らせませう願います。

神事は、末廣稲荷神社例祭終了後に、境内の遥拝所前（車のお祓いをする所）にて斎行されます。



〈茅の輪くぐり〉

神事の後に「茅の輪くぐり」が行われ、ご参列の皆様は神職に続いて茅の輪くぐりをして頂きます。茅の輪くぐりは、当日日没までご参加頂けますので、皆様揃ってご参拝下さい。



〈左：人形・右：申込封筒〉

人形（ひとがた）と申込封筒は社頭にご用意いたしておりますので、必要事項をご記入の上、身体を撫で息を吹きかけ、申込封筒にお志しと共に納め、社務所にお申し込み下さい（右写真）。ご不明の点は社務所にてお尋ね下さい。

▼長寿祈願祭

九月十五日

当社の氏子地域にお住まいの長寿会の皆様をお招きして、更なるご健康とご長寿を祈願いたします。

▼神明神社例祭

十月十七日

当社の境内社として本殿の北西に鎮座し、天照大神をお祀りしております神明神社の例祭です。

崇敬会入会のご案内

本会は、「古来首より上の諸病を憂うる者此の社に願えば靈験あらたか：」と伝わりし御首神社の御神徳に感謝し、ご家族の諸病平癒・無病息災・家内安全生業繁栄並びに子孫繁栄を願う崇敬者の会として設立されました。

入会を望まれます方は、社務所までご一報下さい。早々に案内資料をご用意させていただきます。

会員の特典（抜粋）

- ・入会報告祭の実施
- ・誕生特別祈禱の実施
- ・及び祈禱神符の授与
- ・主要祭典のご案内
- ・昇殿参拝

会員の種類と年会費

個人	三千元
家族	五千元
特別	一万円
法人	二万円
名誉	三万円

〈お問い合わせ先〉

神社社務所まで

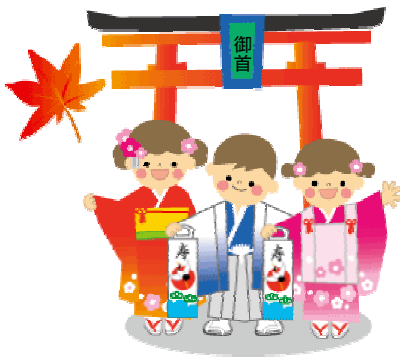
〇五八四一九一―三七〇〇

祭事案内

▼七五三

十月

七五三のお祝いは、平安時代の頃より公家の間で、三歳から七歳位にかけて男女の祝いの儀式が行われて来た事が始まりと言われています。現在では三歳・五歳・七歳と言う成長の節目に神社へ参拝し、これまでの無事成長を感謝し、これから先の健やかな成長を願う儀式として行われております。一般的に七五三のお参りと申しますと、十一月十五日に行われます。その期日の起源につきましては諸説ございますが、江戸時代には諸説ございまして、江戸時代に五代將軍徳川綱吉が長男の徳松の成長を願って氏神様へお参りしたのが、十一月十五日であったとされています。



平成30年 七五三

	数え歳	満年齢
7歳	平成	平成
	24年	23年
	生まれ	生まれ
5歳	平成	平成
	26年	25年
	生まれ	生まれ
3歳	平成	平成
	28年	27年
	生まれ	生まれ

れ、その後広く庶民に広がったと言われております。

お祝いの年齢は古くから数え歳で、男の子が三歳と五歳、女の子が三歳と七歳でお参りされて来ましたが、近年では数え歳・満年齢関係無く、男女共に三歳、五歳、七歳の各歳にご参拝になり、ご祈祷を受けられる方が大変多くなりました。

右に記載の年齢表をご参考の上、ご都合に合わせてご参拝下さい。七五三のご祈禱は十月から年末にかけて随時お仕えいたしております。(予約不要)

▼崇敬会大祭

十一月三日

年に一度、当神社崇敬会会員の皆様の無病息災・家内安全・生業繁栄・子孫繁栄を願い行われます。

当日は、県内外より多くの会員の方が集まり、会員皆様それぞれ交流を深めておられます。

また、ご参列の会員の皆様には大祭祈禱神符が授与されます。(一家族一体授与)

▼新嘗祭

十一月二十三日

三大祭(他には例祭・祈年祭)の一つで、古より大切な神事として行われて来ました。

その年の祈年祭にて祈願致しました、五穀豊穰への感謝をし、初物を神様に食して頂きます。併せて皇室のご安泰、国家の安寧を願います。

また、境内の神饌田にて収穫された御初穂もご神前にお供えされます。

▼月次祭

毎月一日・二十日

末廣稻荷神社
参道幟 募集中

末廣稻荷神社参道の朱色の幟旗は、毎年末廣稻荷神社例祭(八月)とお正月に新調します。ご奉納頂

きました幟は、約半年間に亘り参道に掲げられます。

お稻荷さんと聞きますと、「商売繁盛」を連想されますが、穀物(食物)の神様であり、命を育む上で最も大切でありまして、家内安全・商売繁盛・健康・子孫繁栄に繋がっていきます。



八月取替予定の幟の申込にはまだ余裕がございますので、奉納ご希望の方は社務所までお申込下さい。随時先着順にて受付させて頂きます。

*幟一對 初穂料 三千元

編集後記

今号より編集者が代わりました。新しい社報を作れたらと奮闘しております。

記事投稿、特集希望等ございましたら、お気軽にお寄せ下さい。

岐阜県大垣市荒尾町一二八三の一
御首神社社務所
Eメール spanusyo@mikubi.or.jp
TEL(〇五八四)九一三七〇〇